

まんたら通信

第198号(通巻234号)

平成24年12月 西暦2012年 佛曆2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天香山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



漁師さんのお日待ち

虚空蔵菩薩。宇宙を包み込むほどの福德と智慧をお持ちの仏様。

なんととはや、スケールの大きなお名前です。光が1年かけて届く距離が1光年。最近の科学技術が、ようやく40億光年かなたの星の光を見ることが出来て、鬼の首を取った気持ちになっているのに、何千年前のインドの人達は、それよりも遙かに大きな仏様を考えていた...ということなのです。

お寺の南、畑と長尾川の向こうの虚空蔵山(土地の人は「こーぞー」ですね)の頂上に、今はNHKの中継塔があります。昔、簡素な虚空蔵堂が建っていました。敗戦間際の子供の頃、アメリカの艦載機、グラマン戦闘機を間近に見ようと、怖いもの見たさでここに登ったことは、朽ちかけたお堂が残っていましたが、本尊様ともどもいつの間にか無くなってしまいました。

この虚空蔵様は、川下の漁師さんたちが殊の他大事にしておりましたので、世の中が又穏やかになって、もう一遍お迎えしようということになりました。

これを伝え聞いた、時の町長和頼さんが有名な彫刻家をお願いして、奥様でお医者さんの美和子さんが、ポンと寄進して下さいましたのがこの虚空蔵様です。もう三十年以上も前のことです。

記念の銘版には、
発起人 ろや・吉田国蔵。世話人平重郎・平野熊吉 北下・北下芳郎 左官 木曾清吉 平野重吉 昭和43年10月吉日 云々

と刻まれています。入佛式のお導師には、世界的に有名な奈良薬師寺の長老で、当時既に米寿ほどのお年だった橋本凝胤さまが、お弟子さんたちとおいでになりました。

雲の上の長老を、山の上の急ごしらえの式場にお呼びする町長さんも町長さんなら、ノコノコおいでになる長老も、矢張り評判に違わぬ偉い人でした。

更にまた、この時の総合司会(公会奉行)は、島崎 法界寺の縫ご住職が勤められたのですが、晴れの太舞台に少しも臆することなく進められた司会と、薬師寺のお坊さん達の、野性味あふれる声明の素晴らしさを、昨日のことのようにはっきりと憶えております。

お像の材料は、彫刻家ご本人(今、お名前がどうしても思い出せない。困ったもんだ)のお話では、成田山新勝寺の境内にあったクスノキが、戦後の台風で倒れたものを譲り受けて彫ったということ、その頃はまだ大変良い香りがしていました。

大きさは総丈で五〇〜六〇センチくらい。左手には邪心を打ち壊し、智慧を芽生えさせる三股杵という武器を、右手には無尽蔵の智慧と福德を納める宝珠

をお持ちです。

その徳にあやかりたいと、入学や就職の前や、事業が成功するようにと、虚空蔵菩薩にお祈りする人が、昔から沢山おられるということも、納得できる思いが致します。

また「虚空蔵求聞持法」という、永い期間と大変根気の要る秘法があります。お大師様も、私たち智山派の直接の開祖 覚鑿上人も、この修法で高い境地を得られた、ということでも知られています。

毎年、秋になると川下の漁師の皆さんが、この虚空蔵様を集会所に安置してお祭りを行います。昔、虚空蔵山の頂上のお堂に籠って一夜を明かし、大海原を登ってくる朝日を拝んだ「お日待ち」の名残かと私は思っています。

(この記事は、平成十一年二月三十二号と十八年十二月百二十六号の二回取り上げました。

旧暦十月十二日にあたる十一月二十五日は、穏やかな小春日和でした。今年はお祈りを致しましたが、地元川下の漁師の皆さんは勿論ですが、海女さんたちも三々五々お参りに来ていました。早いもので、あれから四十五年経って、関係した方々は既に故人。過ぎて行く月日の早さを、身にしみて、あらためて思います。)

除夜の鐘と元朝護摩

恒例になった大晦日の除夜の鐘つきは、午後十一時四十五分ころからです。

家内安全を願う「元朝護摩」は午前0時、年の改まる時刻に合わせて行います。

お護摩札の初穂料は二千元です。お申込みをお待ち致します。



て、悪いことばかりしたと、マッカーサーが吹き込んだあべこべ話を吹聴する、朝日新聞に洗脳されたような、恥知らずな日本人が沢山いるのは悲しいことです。マッカーサーは帰国後「日本が立ち上がったのは仕方なかった」と議会で証言していますね。

▼以前も取り上げましたが、季節になると何度でも取り上げたい野草です。晩秋の日差しの11月20日、海岸道路脇の岩場に咲いていたイソギク【キク科キク属】です。まぶしいような黄色と、花びらがいないこと、厚手の葉の縁が白の覆輪に見えて可憐な花ですね。 2012/12/08 龍渉

▼お元気ででしょうか。師走。ただでさえ気ぜわしいところに、16日は衆議院議員総選挙の投票日。長引く円高不況に、尖閣諸島を狙っている中国への目配り、原子力発電をどうするのか、問題は山のように。3年前のような「あんなに言うから一度やらせてみようか」などと言う気軽さはきっぱりと捨て、どの政党が本物か、しっかりと見極めないと崖っぷちから転げ落ちますね。▼今日、12月8日は、「真珠湾攻撃」で太平洋戦争が始まった日です。時の大統領ルーズベルトさんは、堪忍袋の緒が切れて日本が手を挙げることを待っていたくせに「だまし討ちだ」と、アメリカ国民を焚付けて世論を盛り上げました。

余滴

にっぽん人情小噺

第八十三話 行商

三遊亭鳳豊

冬の山里、特に豪雪地帯となりますと、そこに住んでいる村人たちは大変です。今でこそ、車が通れる道路ができたかと思いますが、その昔は、大雪が降りますとまさに陸の孤島でございます。

もちろん、山のなかの小さな村ですから、商店などありません。そんな人たちがどうやって買い物かできたかと申しますと、山を歩いて食料品を売って歩く行商人がいてくれたからなのです。

今日は、長野県と新潟県の県境の小さな村の行商おぼさんの話をしましょう。

おぼさんが行商をはじめたきっかけは、ご主人の事業が失敗し、多額の借金をしよってしまつたからです。いまとちがつて、自己破産なんてできません。

ご夫婦は、親戚中をまわつてお金を貸してくれるよう頼みましたが、誰も相手にしてくれません。家はボロ家だし、田畑を売るにも、小さな田んぼではお金になりません。

家にある金目のものは、すでに借金取りが次々とやってきては、晷はもろん、火鉢からどぶろくの入つた一升びんまで持つていきました。小学生を頭に、四人の子供がいるから、夜逃げもできません。

そこで、おぼさんは決心しました。ある晩、夫にこう言つたのです。

「父ちゃん、東京に出稼ぎに行つて下さい。お金がもつたいないから借金が返せるまで、ここに居つてこなくていいです。そして、その稼いだ金を全部借金を返すために使つて下さい。こちらの暮らしの金は心配しないで。おらが稼いで、子供たちを育てるから。」

おぼさんは「そうするしかない」と心に決めました。ご主人は、それを聞くと「そうだな、このままここで悔やんでばかりいてもしかたないからな。よし、がんばるぞ」と大きな声で叫んで、一週間後に埼玉に出稼ぎに出かけて行きました。

山は紅葉でとてもきれいでした。残されたおぼさん、そうは言つても、田舎ですら仕事があるわけがありません。そんな時、いつもそのあたりの村々を行商して歩いておぼさんがやつてきました。

「どうした、家財道具なんもないじゃないか。え、ちやぶ台まで持つてかれたのか」そのおぼさんは、以前はよく来ては、ご主人とどぶろくを飲んで歌つたり、騒いだりした、気のいいおぼさんでした。事情を聞いたおぼさん、こんなことを言い出したのです。

「そうか、じゃあな、行商をやつたらいいだ。俺が受け持つてるこの地域、あんたに譲るから、ここで売れ。現金収入にはなるからな、子供の学費ぐらい出せるべ。自分らが食べる分は、田んぼでなんとかなるべ」いい人がいたものですね。おぼさんに「行商のこつを教へてもらつたおぼさんは、早速、山を下りて町に行き、昔から知り合の魚やさんに行き、事情を話しました。「よし、わかつた。じゃあ、この生のサンマ、売つて来い」

「仕入れたいけどな、金がねえだよ」「何言つてるんだ、困つて居る時はお互いさまだ。金は売つてきてからでええよ。でも、ひとつだけ約束してくれ。おめえが売るのは生の魚だ。だから、売れ残つても引き取らねえからな。その分のお金、きちんともらうぞ」

おぼさんに人の情けが身に染みました。おぼさん、小さな身体で木箱に入ったサンマ百匹を背負つて山を登る。峠の途中まで来た時、ふと立ち止まりました。激しい

不安に襲われたのです。

（簡単にサンマ背負つてきたけど、いったいどうやって売つたらいいだ）

そりやそうです。いままでも商売なんかしたことがないのだから。しかも、今日全部売らなければならぬ。売れなかつたらまた借金を増やしてしまうだけです。

（ああ、こんなことやらなければよかつた……）

後悔したところで、もう戻れない峠道。覚悟を決めて、ある山里に入つて行きました。すると見えたのが、昔、仲良しだった女友達の家。吸い込まれるように、おぼさん、その家に入つていきます。

すると、その友達が話を聞いてくれ、いつしよに泣いてくれました。

「せつねえなあ、なんで、お前がそんなことしなければいけねえのかなあ……」

おぼさん、この時に勇気が湧いたと言います。

いつしよに泣いてくれる人がいた。それだけで、生きる希望が生まれたそうです。

その家の庭を抜け、大きな声で「サンマ、買つてくれねえかや」と別の家に入ったその時、おぼさん、驚きました。なんと、自分たちが借金をしている相手の家だったのです。そこへ、家の主が出てきました。

そして、おぼさんを見ると「こり笑つて、「おお、ちやうどサンマが食いたかつたんだ。五匹くれ！」と言つて、買つてくれました。借金の話はこれつぼつちも出ない。逆に、隣近所に声をかけてくれたそうです。

この主のおかげで、サンマ百匹がみるみる売れていきました。おぼさんは喜んで山を下り、翌日は、また別の山の村に今度はサンマだけでなく、肉やパン、お菓子を持つて売りに行きました。なかには、現金がないからと、米や大豆と物々交換したお客さんもありました。帰りの背中、そう

した穀物で行きよりも重かつたのですが、それを今度は町で売つて現金にしました。

やがて、雪が降り、豪雪が続いても、おぼさんの行商は雪の上を歩く「かんじき」を履いて続けました。町から山まで三時間。登つては下り、下つては登る。

（父ちゃん、がんばつてなあ。おらもがんばるだからなあ……）

真つ暗になった頃、ようやく家に戻ると、まだ幼い四人の娘がコタツにもぐり、重なるようにして眠っています。

「ごめんよ、いま飯の支度するからなあ」おぼさんは子どもたちに詫びて、急いでご飯の支度をします。

こんな生活が十年続き、借金を返し終つた父ちゃんがようやく帰つてきたのです。しかし、その父ちゃんもまもなく、交通事故で亡くなつてしまいました。

五月号の本誌で紹介した「八十八歳の郵便配達人」清水咲栄さんが、私が会いにかがった時、話してくれた三十八歳の時の話でした。その後も苦勞の連続だった清水さんは、これまでの人生を振り返つて、私にこう教へてくれました。

「つらいことも、慣れればちつともつらくねえもんだ」

いぶし銀のような、派手さはないけれども、じっくり読むと心に残る記事で埋まつている、MOKUという雑誌があります。毎月送つてもらつて居るのですが、定期購読更新の時期になると「今年はどうなさいますか」と電話があります。お会いしたことは勿論ないのですが、落ち着いた声と如何にも教養あふれるようなその女性の応対に、いつも敬服しています。

『にっぽん人情小噺』はこの雑誌の連載読み物で、聞き書きをした著者鳳豊師匠と、この出版社のご好意で転載させて戴いています。